Japan Society of Obstetrics and Gynecology

P4-212 挙児希望のない多嚢胞性卵巣症候群婦人に対するホルモン療法の有用性に関する研究 —低用量ピルと黄体ホルモン療法の比較検討—

日本赤十字社医療センター
宮内彰人，安藤一道，佐藤千歳，杉本充弘

【目的】挙児希望のない多嚢胞性卵巣症候群（PCOS）婦人に対して低用量ピル（OC）あるいは黄体ホルモン剤（MPA）を周期的に投与し，ホルモン療法の妥当性について検討した.【方法】本研究への同意を文書で取得した挙児希望のないPCOS婦人を対象とし，OC（アンジュ28）を消退出血1日目より3周期連続投与するA群と，消退出血14日目よりMPA（ヒスロン）15mg/日を14日間投与しこれを3周期投与するB群に振り分けた．治療開始前，治療中，治療終了後の3回，血中ホルモン値を測定し，同時に超音波検査にて両側最大卵巣径・卵胞数・最大卵胞径・子宮内膜厚を計測した．なお，PCOSの診断には日本産科婦人科学会の診断基準を用いた.【成績】対象症例は全例未婚婦人で年齢は24～29歳，主訴はすべて月経異常で第一度無月経であった．治療前後の超音波検査ではA群・B群共に総卵胞数の減少が認められたが，卵巣径については有意の変化は認められなかった．血中ホルモン値の検討では，A群では治療中にLuteinizing hormone（LH）・Estradiol・Testosterone・Androstenedione・遊離型Testosteroneが低下し，B群ではLHとTestosteroneが低下した．Sex hormone binding globulinについては，A群・B群共に治療前に比べ治療後に若干低下したが，治療中の変動は大きく異なり，A群では高値，B群では低値を示していた．A群・B群共に治療中の月経の周期性は順調になり，治療中止が必要となるような副作用は認めなかった.【結論】OCにより血中Estradiol値が低下することから，子宮内膜癌の発生頻度が上昇する可能性は低いと思われ，月経異常を主訴とする挙児希望のないPCOS婦人に対する治療としてOCは妥当な治療法であると考えられた.

P4-213 クロミフェン抵抗性に関与する諸因子の検討

慶應大
小田英之，丸山哲夫，西川明花，各務真紀，小野政徳，荒瀬　透，内田　浩，青木大輔，吉村泰典

【目的】クロミフェン（Clomiphene Citrate, CC）抵抗性は，排卵障害治療のdecision makingにおいて重要なパラメーターである．CC抵抗性に対しては，インシュリン抵抗性改善薬，グルココルチコイド，あるいはhMGなどの併用療法，さらに海外ではアロマターゼ阻害剤の使用も考慮される．今回われわれは，本邦婦人におけるCC抵抗性に関与する因子を明らかにすることを目的とした.【方法】2004～2007年に当院初診の月経不順・無月経を主訴とした患者386名のうち，早発卵巣不全及び第二度無月経を除くCC投与（50～150mg/日・5日間）を受けた挙児希望患者41名を対象とした．初診時年齢，既往月経歴，BMI，LH，FSH，LH/FSH比，prolactin，E2，DHEA-S，testosterone，および遊離testosteroneの値を，排卵群と非排卵群の両群間で，$\chi 2$乗検定，Man-WhitneyU検定，およびstudent-t検定を用いて後方視的に比較検討した.【成績】排卵群（n=36）と非排卵群（n=5）の両群間において，年齢および各ホルモン値に有意な差は認めなかった．しかし，排卵群の16名は既往月経歴が希発月経を呈していたのに対して，非排卵群は全員無月経であった($P<0.05$)．なお，排卵群の9名に妊娠が成立した．1993年の日産婦PCOS診断基準案（旧基準）によりPCOSと診断された患者26名のうち，24名（92.3%）はCCに反応して排卵を認め，5名が妊娠に至った.【結論】BMI，年齢，および各ホルモン値ではなく，既往月経歴における無月経の有無が，CC抵抗性を規定する可能性が示唆された．今回の検討で示されたPCOSの高いCC反応性は，旧基準の問題点，挙児希望患者のみに限定したCC投与などに起因する可能性が考えられた.

P4-214 セドロールの更年期愁訴および睡眠障害に対する心臓自律機能からの作用機序と長期有用性に関する研究

千葉西総合病院
廣瀬一浩

【目的】香気成分セドロールの夜間揮散が，短期では更年期愁訴および睡眠障害を改善することを既に報告した．本研究では夜間の心臓自律神経機能および連続活動量での睡眠記録により作用機序の検討と長期的評価を行いその有用性につき検討した.【方法】研究の主旨を説明し書面にて同意の得た更年期愁訴を呈する5例（52.8±2.4歳）に，自宅にて腕時計型脈波センサによる脈波間隔変動周波数とアクチグラフによる睡眠変数を計測した．自覚的評価は，簡略更年期指数（SMI）とピッツバーグ睡眠質問紙（PSQI）を用いた．基準状態の測定後，セドロールを連日夜間揮散し4週後に評価した．また他の4例（61.5±4.8歳）について，セドロール揮散最長152週後まで，SMIおよびPSQIを用い評価した．更年期愁訴については，不定愁訴症状と血管運動神経症状に分類し検討した.【成績】1）脈拍数，心臓交感神経活動を反映する%LFには揮散前後で変化はみられなかった．一方迷走神経活動を反映するHFは，平均でほぼ25%の増加が認められた．TSTは揮散前408分から360分とコンパクト化し，WASOには変化はなかった．SMIは著名に改善した．2）長期投与では，不定愁訴症状は，揮散前に比べ揮散112～144週後まで40%前後の改善を示し，PSQIは揮散後20%強の改善を長期に渡り示した．一方で，血管運動神経症状には長期投与で効果はみられなかった.【結論】短期の更年期愁訴改善効果は，セドロールの有する副交感神経活動賦活作用によるものと推察された．また更年期不定愁訴および睡眠障害にセドロールは長期に渡り改善効果を示したが，血管運動神経症状に対する効果は弱く，睡眠改善を介して更年期愁訴を改善した可能性が示唆された.

NII-Electronic Library Service